

栄ちゃんの

熱血

# 演歌塾

## 『湯の町月夜』

編



雄大に聳え立つ富士山の姿を眺めながら、愛しい女性を探し求める男の寂しさを歌います。男の許を去った女の存在の大きさは何ものにも埋め難く、思いあぐねて微かな風の便りを宛てに、その消息を伊豆を訪ねます。

しかしその願いも叶わず、箱根路に咲く花、相模灘に浮かぶ月、伊豆半島に吹く夜風にその空しい思いを吐露します。二人の愛の巣を旅立った女への断ち難い未練ごころを歌う恋唄です。そんな背景を心の内に思い描きながら歌い出します。

いつも言いますが歌い出す前にそのイメージを思い描き事を忘れないように！

その方法は歌の詩を良く読む事と、イントロ（前奏）のサウンドを良く聞く事です。

イントロにはその歌のテーマのエッセンスが練り込められています。

その10数秒の間に感じ取って下さい。そしてその物語に身も心も入って行きます。

それでは行ってみましょう。

～惚れているから身を引きますと～ここは女の話し言葉で始まります。

惚れた男に対しての情愛を持ってしみじみと。

冒頭の“ほ”の歌い出し前の附点八分の休符は思いを溜めてと言う事です。

手法的には口をすぼめて丸い形にして唇の力を抜いて

柔らかく言葉を出し、それ以降は話す言葉をさらさらと巻紙にしたための感じですが。

それも厳つい書体では無く、草書で取り急ぎと言う感じです。

～わずか二行の～ここも前節と同じ感じで！

ここまで冒頭の三小節は全て一小節に七つの言葉数が割り振られています。

この様なパターンの時は、どんな歌でもリズムに乗り遅れない事が第一です。

そして～置手紙～は二小節で五文字。この言葉に女の思いが集約されていると同時に次のサビの部分に行く為の助走の意味もあり言葉がゆったりと割り振られています。

5小節目はオーケストラの演奏が激しく動き又、鳴り出します。

～うわさ訪ねる箱根路の～サビに入った三行目は男の熱く燃える激しい恋心を描きます。ゆったりと大きく！

伸び伸びと大自然の中で声の届く限りどこまでも遠くに声を飛ばす感じです。艶な声では無く猛々しい雄叫びと言ってもいいかもしれません。

前節二行と落差があればある程お互いの行が生きます。

女の心情と男の熱情を使い分けて下さい。それと同時に情景描写の側面もあり、

箱根の雄大な景観もその声の量で描き上げて下さい。～箱根路の～最後の“の”がこの歌の中で一番声を張る部分です。

その長さもその小節一杯4拍を歌い延ばして下さい。そして次の小節の頭一拍目の八分休符の間にプレス（呼吸）を素早くしましょう。～花に愛しい笑顔が揺れる～

ここでは男の胸に女の面影が溢れます。冒頭と同じく女性を表現し、その姿を描きます。

歌い出しと同じく二小節の間に七文字が二回続きます。

声の量より言葉を明確に突きます。

只、冒頭の二行は女のセリフ。ここは男目線での女の可愛さを歌います。二人で楽しく過ごした回想シーンになります。

その違いを歌い分けるのも一つのテクニックです。

4行目は～ああ君に逢いたい～情的にこの歌の肝になるパートです。

冒頭二行の女の言葉～惚れているから・・・～に対してそれに呼応する気持を精一杯表現します。

そしてこの2小節の一拍目は一拍分丸つきり休符になっています。

この意味はプレスを深く、じっくりと思いを溜めて！情景を歌うのでは無く、心の一番深いところにある気持を吐露します。しかし決して粗野な声と語りでは興ざめです。口説きの部分です。あくまでも柔らかい声で！

～湯の町月夜～治めの言葉です。ここはタイトルにもなっている位ですから、まっさらなキャンパスに太い筆で揮毫するような感じで悠然と歌い上げて下さい。

惚れているから身を引きますと  
わずか二行の置き手紙  
噂たずねる箱根路の笑顔がゆれる  
花に愛しい笑顔がゆれる  
ああ君に逢いたい  
湯の町月夜

作詩 仁井谷俊也

作曲 原譲二  
編曲 南郷達也